腫否定できず，腫瘤切除術を行う．左横隔膜脚部筋肉内に，多房性腫瘤あり，内部に白濁粘稠な液体を含む．病理では1から数層の線毛円柱上皮に覆われた気管支様構造物を認め，EPS と診断される．栄養動脈は同定できなかった．

EPS は日本で今まで約40数例の報告（石原ら38例を含め）あるが大多数は，横隔膜より上に存在し，横隔膜下2例あるのみ，本例は横隔膜内に存在して両者の移行形として興味深い．

第22回新潟画像医学研究会

日　時　平成元年11月11日（土）
午後2時より

会　場　新潟大学歯学部2階講堂

一　般　演　題

1）造影 CT による上顎洞病変の鑑別診断：CT 値の応用

二宮　秀一・江口　　徹
和田　慎一・北村　信安
前多　一雄
（日本歯科大学新潟歯学部放射線科）

今回我々は，従来，骨破壊の有無などを基準としてきた CT 上での上顎洞疾患の質的診断に対し，造影 CT を行ない病変部の CT 値の増加分と反対側正常外側翼突筋の CT 値の増加分との比（enhancement ratio）を求めることにより，上顎洞疾患に対する鑑別診断の可能性について検討したので報告した．

対象は昭和58年11月から平成元年9月までに日歯大新潟放射線科で施行された CT 192 例のうち，臨床的に腫瘍性病変が疑われたためプレーン CT に加え，静注造影 CT を行なった悪性腫瘍9例，炎症性疾患21例，嚢胞性疾患22例，の計52例であった．

その結果，悪性腫瘍と炎症性疾患との間，また，悪性腫瘍と嚢胞性疾患との間に危険率1％で，enhancement ratio に有意な差が認められ，造影前後の CT 値を計測することで悪性腫瘍と他の疾患とを鑑別できる可能性が示唆され，この検査方法を用いた鑑別診断が臨床応用できるのではないかと考えられた．

2）口蓋部腫瘍の CT 所見

佐藤　正治・足利谷美砂
林　　孝文・中山　　均
佐々木富貴子・中村太保
伊藤　寿介
（新潟大学歯学部歯科放射線科）
鈴木　　誠
（同 口腔病理学）

今回我々は，口蓋部に発生した腫瘍の初診 CT を比較検討した．対象は，病理組織学的に pleomorphic adenoma（6例），ca in pleomorphic adenoma（1例），adenoid cystic carcinoma（5例），と診断のついた12例である．

pleomorphic adenoma は，口蓋部の骨を圧迫吸収した像を呈したが，鼻腔側への mass の進展はなかった．

ca in pleomorphic adenoma は，口蓋部の骨の鼻腔側の連続性は保たれているものの，口腔側の骨が不規則に陥凹している像であった．また，その周囲に骨硬化像も認められた．しかし，鼻腔側への mass の進展はなかった．

adenoid cystic carcinoma に関しては，小さな mass を形成する症例においても，口蓋部の骨を diffuse に破壊して，骨の連続性が失われており，鼻腔側への mass の進展が疑われた．

しかるに，口蓋部腫瘍の画像診断に際しては，coronal の super high resolution の CT 撮影は必須と考えられる．

3）下顎骨への転移性腫瘍の CT 所見

足利谷美砂・佐藤　正治
林　　孝文・中山　　均
佐々木富貴子・中村太保
伊藤　寿介
（新潟大学歯学部歯科放射線科）

口腔領域に発生する転移性腫瘍は比較的稀であり，その診断は容易ではない．今回我々は他臓器原発の悪性腫瘍の下顎骨転移と思われる2症例を経験したので報告する．症例1は60才の男性で左下唇のしびれを，症例2は74才の男性で右下顎の腫脹を主訴に本学口腔外科に来院した．biopsy の結果，どちらも病理診断は口腔内では珍しい adenocarcinoma の組織型で，全身検索の結果，それぞれ pancreas，prostate に原発巣が発見された．単純X線写真では，症例1でオトガイ孔，症例2では下顎孔部の下顎管が不明瞭で周囲骨構造には瀰慢性の破壊像が認められた．X線 CT では2例とも病変部下顎管は破壊像を示し顎骨内部を中心に破壊されており，症例1ではオトガイ孔の破壊と腫瘍の骨外部への連続，症例

2では下顎孔の破壊と同部位からの腫瘍の突出が見られた．この様な所見を得た時には転移性腫瘍も疑い，全身的な検索が必要であると思われる．

4）結核性頸部リンパ節炎の1例

高瀬　裕志・外山三智雄
平山　昭平・江口　　徹
前多　一雄　（日本歯科大学新潟歯学部放射線科）
海野　　仁・山口　　晃
西村　恒一　（同 口腔外科第一）

結核性頸部リンパ節炎は悪性腫瘍との鑑別が困難な場合があり診断には注意を要する疾患である．最近我々は，46歳女性の左側耳下部に発生した本症を経験したので，その概要を報告すると共に各種放射線学的検査結果を供覧した．主訴は左側耳下部の無痛性腫瘤で，既往歴，家族歴に特記事項はなかった．現病歴では，平成元年6月より同部に腫瘤を自覚したため某歯科にて抗生剤投与をうけた．しかし，改善がないため本学口腔外科第一講座を紹介され来院した．現症として，左側耳下部に30×20 mm の境界明瞭，弾性やや硬，可動性の腫瘤を触知した．臨床検査所見では，赤沈の促進があり，また，ツベルクリン反応は陽性だった．放射線学的検査所見では，造影 CT 像で rim enhancement を呈したこと，また，^{67}Ga シンチグラムで腫瘤に一致した部位に集積亢進が認められたことから，悪性病変との鑑別に苦慮した症例であった．

5）胃・十二指腸動脈瘤の1例

真船　善朗・尾崎　俊彦　（済生会新潟総合病院内科）
本間　　明
相場　哲朗・川口　正樹（　同　　外科）

胃十二指腸動脈の動脈瘤は，臓器動脈瘤の中で最も頻度が低いとされているが，我々はその1例を経験したので報告する．症例は83歳女性．30歳時に子宮外妊娠の既往あり，平成元年6月，食欲不振を主訴とし来院．受診時，腹部エコーにて6×5 cm の mixed pattern を呈する腫瘤性病変を認め，精査入院となった．腹部単純では上腹部に径8×5 cm の類円形の石灰化陰影を認めた．ドップラーエコーでは，嚢胞状の部位に動脈性の血流を認めた．腹部造影 CT では低濃度域内が類円形濃染像として描出され，一部に壁在血栓の存在が示唆された．最終的に腹腔動脈造影にて，胃十二指腸動脈瘤と診断された．文献的には，胃十二指腸動脈瘤は，術後，膵炎やTAE 後に発見されることが多いが，本症例では原因不明であった．

6）腹部 CT におけるバリウム造影剤の使用経験

樋口　健史　（新潟大学放射線科）
林　　浩子・山岸　広明　（新潟県立中央病院放射線科）

今回，我々は腹部 CT 用 Barium 製剤を使用する経験があり，比較的良好な結果が得られたのでこれを報告した．CT 検査で腹部，骨盤腔あるいは両方をスキャン範囲とする症例のなかから10例を無作為に選び対象とし，硫酸バリウム 4.77^{w}/v %製剤を3倍希釈し，750mlを3回に分けて経口投与した後に CT を撮影した．その結果，多くの症例で十二指腸とその周辺臓器との識別は容易になり，上腹部の診断に際しては有用な場合が多いと考えられた．しかし，今回の投与量では骨盤腔内の小腸を十分充満出来なかった．硫酸バリウムの濃度は1.59%で十分な造影効果があると思われた．この硫酸バリウム製剤は比較的飲みやすく，明らかな副作用は認められなかった．

7）両側副腎に初発した悪性リンパ腫の2例

清野　泰之　（新潟大学放射線科）
川崎　俊彦・佐藤　玲子　（長岡赤十字病院放射線科）
秋田　真一
林　　浩子・山岸　広明　（新潟県立中央病院放射線科）

Non-Hodgkin's Lymphoma（NHL）においてリンパ節外浸潤をしめすものはまれではないが，副腎が初発と考えられる場合は少ない．3例の副腎初発と考えられる NHL を紹介するとともに，あわせて文献上の考察を加えた．NHL の retrospective CT study では，1～4%に副腎の浸潤がみられると報告されている．また，組織では diffuse histiocytic が多くみられた．画像診断上両側ないしは片側性のびまん性副腎腫大としてとらえられ，通常は内部性状は均一である．また，ほとんどの例で，隣接臓器の浸潤や後腹膜リンパ節の腫大を伴っている．この点から CT は診断上最も有力な手段と考えられる．これらの付随所見を欠くとき鑑別診断が困難な場合がある．